

## 児童健全育成賞（數納賞）佳 作

# 誰もが主役になれる児童館をめざして —マイスクール児童館のとりくみ—

宮城県仙台市

仙台市立町マイスクール児童館 館長 小 泉 節 子

### はじめに

私の勤務している児童館は、小学校の空き教室を活用するマイスクール児童館です。小学校は1学年1クラスづつ、全校でも児童数は200名を超えない小規模校なので、空き教室は様々な特別教室として活用されています。その校舎1階の角に位置し、総面積が教室2部屋分位、玄関を入れると児童館全体を見渡せるワンフロアの作りの児童館が、私たちのマイスクール児童館なのです。

仙台市は小学校区ごとに児童館を設置しています。私たちの小学校があるのは市の中心部で、伊達政宗で有名な仙台城跡も徒歩圏内です。地域の特徴としては、城下町として栄えた歴史ある商人の町、歴史ある職人さんたちの住む町で、その歴史の積み重ねから人と人との繋がりはとても強い地域です。また、学区内には高校、大学、専門学校などがたくさん建ち並ぶ、文教地区でもあります。

そのような地域に建つ小規模校だからこそ地域の方が講師として来校したり、学生が地域の様々なイベントに協力したりしながら、地域で子どもの成長を見守るという態勢ができあがっている、そんな地域でもあります。

私たちの児童館はそこに、特定非営利活動法人を運営母体とする公設民営の児童館として開館し、11年目を迎えました。児童館事業の一つとして放課後児童クラブを開設しており、放

課後の館内は、放課後児童クラブ登録児童と自由来館児童が入り乱れ、時には乳幼児親子も加わって賑やかな時間となります。

ワンフロアという構造上事務室は独立しておらず、部屋と事務スペースの境界にちょっとした仕切りがあるだけです。それもあってか、来館者からは「職員の皆さんとの距離が近くてアットホームな雰囲気がいい。」との声をいただいている。

その児童館の放課後児童クラブに、気になる様子の男児が登録をしてきたのは、今から4年半前のことでした。その男児Aくんとの関わりを通して、支援の必要な子とどう向き合っていったら良いのか、そして、マイスクール児童館の良さを生かしての関わりとはどのようなものなのか等について考えさせられました。Aくんと過ごした日々は、私たち職員にとって大きな学びの時でもありましたし、その学びの先に現在の児童館の姿があると言っても過言ではありません。その4年半の記録をひもときながら、子どもたちが生き生きと過ごせる児童館とはどのようなものなのかについて考えてみました。

### Aくんとの出会い

今から4年半ほど前の4月のこと、あどけないかわいらしい顔をしたAくんが放課後児童クラブの利用を始めましたが、その様子は初日からとても気になるものでした。“座っていられ

ない。ひっきりなしに他児とトラブルになり目が離せない。カッとなりすぐに手足が出る。気持ちの切り換えに時間がかかる。”等の様子が当時の日誌に記録されています。夕方迎えに来た母に対しても「帰らない！」と叫んで床に寝転がり駄々をこねていました。この様子を受けて、職員全員で彼の様子について共有し翌日からの対応について話し合いを持ちました。入学式を迎えるまでの春休み中は、職員の誰かが必ず彼の傍についてすぐトラブル対応ができるようしました。

学校生活が始まるとますます、様々な困難さが表れてきました。他児とのトラブルがない日は珍しく、毎日のようにその日のでき事について、学校から母に電話連絡が入っていたようです。また、迎えの時間を持って、担任や教頭が児童館に来て母親と話し込む様子も見られました。建物の構造上児童館の扉を開けると小学校の廊下に繋がっていて、そこから30mも歩けば職員室でしたので、行き来しやすい環境になりました。

彼は極端に自尊感情の低い子で、口について出てくる言葉は「どうせオレなんて！」「死んでやる！」「ぶっ殺す！」等ばかり、仕舞には、本当に道路に飛び出して行く始末で、その様子に私たち職員は、なぜここまで自尊感情が低いのか、なぜこのような言葉しか出でこないのか等、彼の中で絡み合ってしまったのだろう様々な要因に思いを巡らし、どこから解いていくことができるのかと思案に暮れていくでした。彼が在籍する学年には、同じような困難さを抱えてしまった児童が多数おり、同じ空間にいると刺激しあってしまうことも悩みの種でした。職員全員で話し合いを持ち、Aくんは勿論この学年の子たちの様子をしっかり観察し見極めようという共通の思いを持って、情報収集や情報共有に努めることにしました。一番近い距離にある小学校との情報共有は、特に意識して行うことにしました。それと共に、できる限りの学びも続けました。

## 児童館サポート事業を通して

近年、様々な特徴・特性を持った子どもたちが放課後児童クラブに集まつてくるようになりました。私たちの法人で運営している放課後児童クラブでもそれは同じで、そのような子たちの対応に苦戦している現場のためにということで、法人として平成25年度から『児童館サポート事業』に取り組んでいました。ですから、その事業を通しての学びや気づきを元にAくんとの向き合い方について考えていくことにしました。

取り組み続けて今年で6年目になる『児童館サポート事業』について説明をします。“サポートリーダー養成講座”と“各館巡回サポート”的2本立てで行っている事業です。

### サポートリーダー養成講座

まず、各児童館のリーダーとなって支援の必要な子との向き合い方や子どもの出すサインの受け止め方、子どもをまん中においた支援とはどのようなものか等について考えていく職員を各館から任命します。その職員が“サポートリーダー”です。そして、特別支援教育士や保育心理士等の専門知識を持った方々をスーパーバイザーとして迎え、サポートリーダーを対象に講義をしてもらいます。内容は『発達支援を必要とする子どもの理解と支援の実際』『こどもたちを笑顔にする配慮のあり方を学ぶ』『チームで支援する』等、様々なテーマに添ったものになっています。

支援の基本はまん中に子どもがいること、サポートリーダーはその思いで講義を受講し、内容を自分の児童館に持ち帰り、職員に報告をして内容の共有を図ります。これが1本目の柱“サポートリーダー養成講座”で、年3回実施しています。

### 各館巡回サポート

スーパーバイザーの方々に各児童館を巡回してもらいながら、ケース会議をしたり実際に子どもたちの様子を見てもらうことを通して、アドバイス等をしてもらうのが“各館巡回サポート”です。この巡回サポートの際には『あそぶ、

たべる、まなぶ、はなす、くらす』の5つの観点から、家庭、学校、児童館での子どもの様子を『インテークシート』にまとめ、また支援者の観点からは『アセスメントフェイスシート』を記入します。サポートリーダーを中心となって記入したこれらのシートを元にケース会議を行います。ケース会議の際に気をつけなければならないのは、職員が対応に困っているのか、子ども自身が困っているのかの視点を明確にして考えていくということです。

児童館サポート事業の根底にある子どもとの向き合い方の基本は『否定しない、強制しない、丁寧に』です。そして支援者として最も大切なことは『自分の良さを知り、互いを認め合う仲間と共にチームとして子どもと向き合う』ことです。それと同時に子どもを信じて『待つ』支援も大切で、これらのことを通して、本当の意味で『安心、安全な子どもたちの居場所作り』に繋げていこうという想いで、この事業を続けています。

この年の巡回サポートの際にAくんへの向き合い方で、次のようにアドバイスを受けました。「Aくんは、認めてもらいたいだけなのではないか。いいことをしてもいい反応がなかったのかも知れない。いい言葉との出会いがなかったのかも知れない。だから悪い方の意味で気を引こうとしているのではないか。声掛けの仕方、評価の仕方を考えて、いい時にいい反応を返してあげるようにしてみてはどうか。」

このアドバイスを受けて、今自分たちができるとはどんなことだろうか、ということを職員全員で話し合いました。そして「児童館では子どもたちと話す時に否定的な言葉は使わないようにしよう。否定するような言い方はしないようにしよう。」と決めました。

Aくんから発せられる要望・要求は可能な限り実現できるようにしていきました。実現困難な要望でも否定するのではなく、代案を出して対応することにしました。どうしたらいいかと一緒に考えることにしました。それでも彼から

発せられる言葉は「どうせ聞いてくれないもん！」「どうせダメって言うもん！」という言葉で、言いながらドアを蹴ったり物を投げたり柵をひっくり返そうとしたりする姿は長く続きました。

対応する職員の心が折れそうになりながらも、根気強く向き合い続けました。Aくんの要望、要求に応えるのは館長で、他の職員は彼が少しでも前向きになれるように「館長に聞いてみよう」と声掛けを続けるというように役割分担をしました。そして彼が言葉で伝えることができた時には「話してくれてありがとう」と伝え続けました。

並行して母との面談も続けていました。家族構成は、若くして結婚した父と母、5歳違いの弟の4人暮らしで、近所には父方母方双方の祖父母が住んでおり何かと協力は得られやすい環境にありました。母の口から出てくる言葉は「うちの子、本当にダメだよね。」と苦しい子育てを物語るような言葉でした。苦しさの余り、職員と目を合わせることさえ避けるようになってしまったこともあります。そのような中でほんの少し聞き出せた情報としては、Aくんは夜泣きが激しく布団で寝ない子だったので、よく父親が車に乗せてドライブし寝かしつけていたこと、今は父親がとても厳しくAくんに接していて、そんな父子の姿に母は心を痛めている、というようなことでした。

母の苦しさを理解しながらも“気にかけてるよ”という思いを持って連携を図ることに心を砕いていきました。職員の中でも更に役割分担をし、Aくんが話しやすそうな職員はAくんに、母が話しやすそうな職員は母に声掛けをし続けました。これも根気のいることでした。

## ある職人さんとの出会い

児童館では毎年、近所にお店のある職人さんに来てもらってワークショップを開催していました。この年も11月に開催し、その席にAくんもいました。ところが、そこに参加するどころか、他児と髪をひっぱり合い取っ組み合いの喧嘩を始めてしまい、職人の皆さんを驚かせて

しまったのです。

職人の皆さんには、彼の日常の様子とこの日どうして喧嘩を始めたのかについて説明をしたところ、時間をおいて少し落ち着きを取り戻した彼に対して、個別に対応し教えてくれたのです。みんなから遅れをとったものの、Aくんは職人さんの力を借りながら作品を作りあげることができました。すぐ注意がそれ集中力も切れてしまう彼にじっくり向き合ってくれる職人さんの姿に、彼は親愛を込めてその方を“アニキ”と呼び始めました。

それから数ヶ月後、その時の職人さんから驚きの連絡が入りました。それは、職人さんが作業しているお店の前をAくんが通る時に「よっ！アニキ」と声をかけてくれるようになった、ということでした。Aくんにとってこの職人さんとの出会いは、それだけ心に響く出会いだったのかも知れません。

## 2年生になると

1年生の終わり頃にはAくんは、少しづつではありますが思いを言葉にできるようになっていました。「どうせ」という言葉を口にする回数も減ってきましたが、自尊感情の低さは変わらず、他児が発した些細な言葉にも反応してしまい暴言暴力に繋がることはまだ続していました。

2年生になると、Aくんとお互いに刺激しあっていたBくんがパワーアップしてきました。彼も自尊感情が低く気持ちの切り替えがうまくいかない子でした。ゲームに負けることや活動で失敗するということにとても過敏で、大粒の涙を流しながら大声で叫びながらの暴言暴力に繋がっていました。このBくんにひきづられるようにしてAくんの気持ちもより落ちつかなくなってしまいました。

2人共発想や遊び方はとてもユニークなものがあり、調子の良い時には周りの子も巻き込んで面白い遊びを展開していました。周りの子たちもそれを感じていて、一緒にいると独創的な遊びができるその面白さに、次第にひかれてい

きました。その様子を見ていると周りの子たちと良い関係作りができれば、2人の様子も変わるような気がしました。

そこで、気持ちに波があり調子が悪くて乱れてしまう時はどんな時なのだろう、と観察することにしました。本人や周りの子たちにも聞いてみました。すると、朝家を出る時にいいスタートが切れていないかったり、学校で心が乱れる何かがあり、その気持ちをひきずったまま児童館に来てトラブルを起こすことが多いということが見えてきました。

学校の先生方とは毎年最低2回、放課後児童クラブに出席している子たちの様子について、情報交換、情報共有する機会を設けていました。また、マイスクール児童館という特徴を生かして、気にかかる子の様子については常に先生方と話しができるような関係作りに努めてきましたが、この年は特に、何度も職員室をたずねたり廊下で先生を呼び止めたりしながら、常に話しをしていました。

## 児童館の環境を考える

様々なところから情報収集をしながら、児童館でのトラブルを防ぐ方法を模索していました。この年は、AくんBくんはじめ視覚に過敏で狭い空間にいると周りの子たちの様々な言動が刺激になってしまう子たちがたくさんいました。部屋の構造上同じ空間にいると刺激があり過ぎるので、できる限り広い空間で過ごすことを考えました。授業が終われば校庭を使えることになっていましたので、子どもたちが児童館に帰り次第、順に校庭に出て遊ぶことにしました。それまでは出欠確認をしてからの外遊びでしたが、各職員がそれぞれの担当の場で確認し伝え合う形に変え、子どもたちをすぐに校庭に出すことになりました。

すると、帰ってきてすぐの取組み合いは見られなくなりました。1人1人のスペースが広がりその広い空間で思い切り体を動かして遊べることは、心の開放にも繋がっていたようです。それでも遊びの展開によっては、言葉のとり違

いや思い違い、それぞれのルールへのこだわりなどからくる思いのぶつかり合いから取組み合いが始まることもあります、広い空間での子どもたちの動きをしっかり把握しておかなければならないという緊張感はありました。時にはトラブルの結果として校門を飛び出してしまうこともあります、常に目が離せない状況ではありました。

そして、Aくんたちは学校からまっすぐ下校せず途中の校庭の遊具に寄り道したり、学校の規則では遊んでいけないことになっている場所を“秘密基地”と称して寄り道し、児童館に帰つて来ない時もありました。理由を聞いてみると「ブランコで高くまでこげるようになったよ！」「ここはオレたちの秘密基地なんだから！」とキラキラした瞳で話し、その純粋さに私たち職員は叱ることはできずに「そうかあ」と言うことしかできませんでした。“してはいけない、行ってはいけない”というルールは、彼らには何の意味もなく、ただ純粋に心の赴くままに行動している、そんな彼らに“大人側のルールや都合はそぐわないのだ”と教えられました。

ですからそんな時には無理に入室させることはせず、居場所の確認と安全確保にのみ留意して見守りを続けることにしました。幸いにも校庭の遊具は児童館から見える場所にありましたし、秘密基地もちょっと入り組んだ場所ながら児童館とは目と鼻の先にありましたから、学校にも放課後の時間は児童館が責任を持って見守るのでその場所を使わせてほしいことをお願いしました。

『児童館サポート事業』でお世話になっている先生方が、たまたま近隣の施設に講師として定期的に通っていたこともあり、秘密基地にいる彼らに気づいて何度も声をかけてもらうことができたというのも、とても心強いことでした。彼らにとっては、自分たちに声をかけてくれる面白い人という感覚だったようで、すっかり心を許していました。

## 周りの子たちの力を借りて

Aくんは少しづつ思いを言葉にできるように

なっていました。しかし、思いが通らないと物を投げたり掲示物を破いたり、周りの子にやつあたりしたりする姿はまだ続いていて、体が大きくなつた分、暴れ始めた時に周りの子に危害が及ぶ危険性が増え、周りの子への配慮が必要となっていました。子ども同士の関係の深まりから思いのぶつかり合いが生まれ、思いが通らず暴れ出すということが日常になってきたのです。

そこでAくんやBくんが心乱した時は、周りの子に彼らの気持ちを伝えるようにしました。私たち職員が彼らの気持ちとどうすればクールダウンできるのかも含めて代弁し、協力してもらいました。

周りの子たちは、すでに彼らの魅力には十分気づいていましたので、心乱してしまった時の様子に何か思うところもあったのでしょう。私たちが伝える言葉をしっかり理解してくれて、彼らが物を投げ始めたら危険な物をさり気なく周囲から片付けたり、学校で何かあった時にはまっ先にでき事を伝えてくれて「だから今日はうまくいかない日かも」と教えてくれるようになりました。

それによって私たち職員も、前もって環境に配慮したり、タイムスケジュールの変更や職員配置・対応の仕方等心の準備をした上で彼らと向き合うことができるようになってきました。周りの子たちには「ありがとう」と感謝の言葉を伝え続けました。

母の苦しみは続いていました。専門機関にも行きましたが、母の心の中は整理がつかずに混乱しているようでした。私たちは学校の先生方と共に「今現在発達の仕方、成長の仕方に凹凸があるけど、Aくんにはいいところいっぱいあるし、いろんなこと頑張れるようになったよ。」と言い続け、児童館でもみんなから愛されていふることを伝え続けました。

## 3年目を迎えると

Aくんが放課後児童クラブで過ごすようになつて3年目を迎えるました。私たち職員がAくんと

の関わり方を学んだこと、彼自身の心の成長があつたこと、周りの子との関係作りができてきしたこと等あり、心を乱す回数は減っていました。不安定な様子が見られたら、気分転換できるような働きかけや声掛けをしていきました。

ある時には「児童館つまんねえ。オレはいじめられている。」と母に訴えることもありました。この頃には母とも、家庭での様子児童館での様子を伝え合うことができるようになっていました。Bくんとのトラブルは学校でも頻繁にあり、それもあって“学校も児童館もイヤだ”という思いになっていたようでした。お互いの母ともその2人の様子を伝え合いながら「まるで兄弟のようだね。」との認識を持つに到っていました。ですから、この訴えに心を寄せながらも、それでも離れられない2人の思いを感じながら折り合いをつけつつ過ごすという日々になっていました。

ここでAくんもBくんも放課後児童クラブの登録が終了となりました。本人と保護者の想いによるものでしたが、私たち職員はこの時期に彼らとの繋がりが切れてしまうことに一抹の不安を抱いていました。

3年間の間にAくんの父方母方双方のおばあちゃんたちともコミュニケーションがとれるまでになっていましたから、「今後何か気になる様子があったら連絡を取り合いましょう」と話しをして、3月、Aくんを見送りました。

そしてそれ以降、私たちは、その心配が完全に危惧であったという光景を目にすることになるのです。

## 頼りになるリーダーとして

4月、春休みになると、Aくんは毎日のように自由来館として児童館に足を運んでくれました。何かの時にすぐに連絡がとれるように持たされたという携帯電話を「あづかって。」と職員に渡し、遊びのリーダーとして下学年の子たちを盛り立ててくれる姿がそこにはありました。新1年生に児童館を案内しながら部屋の使い方などを説明する『児童館探検』では、誰よ

りも張り切って先頭に立ち案内をしてくれていました。

新学期が始まるとき放課後のAくんの姿は校庭にありました。同学年の子たちが集まってドッジボールやキックベースボールをするその輪の中心で、生き生きと遊んでいました。放課後児童クラブの子たちもその輪の中に加えてくれて遊んでいる姿に、私たちは驚きと感動を覚えました。放課後の過ごし方を自分で組み立てている姿に頼もしさを感じました。Aくんの中に秘められていた力を見ることができました。

学校の振替休業日や長期休業日等にも遊びに来てくれて、校庭ではもちろん、狭い館内でも工夫しながらドッジボールやキックベースボールをして遊んでいました。その姿に下学年男子はすっかり心を奪われ、あこがれの存在になっていました。

## 職人さんとの関わりを通して

Aくんが1年生の時にワークショップを通じて顔見知りになり、Aくんが“アニキ”と慕う職人さんには、その後も毎年ワークショップの開催をお願いしていました。その際にはいつもAくんのことが話題にのぼるのでした。職人さんによると、彼は作業場の前を通る時には必ず「よ！アニキ」と声をかけていたとのこと、後にも先にもそうやって声をかけてくれたのは彼1人だったこと等、とても暖かいまなざしを持って話しかけていました。

そして、5年生になった今年、Aくんはいつものように作業場の前を通る時に、職人さんに深々とおじぎをしながら「こんにちは」と挨拶をしたそうです。目を細めてその話しかけてくれる職人さんには、本当に感謝です。子どもたちへの深い想いを感じました。Aくんもきっとその想いを感じとったからこそ、そのような姿を見せたのだろうなと思いました。

今でも学校行事や日常の学校生活の中に、成長したAくんやBくんの姿を見る事ができます。私たちはこれからもずっと彼らの応援団として、彼らの成長を見守っていきたいと思って

います。

## 児童館としての新たな取り組み

今年の春、授業中にも関わらず校庭にいる女児の姿に気づきました。そして6月、児童館前の昇降口で母と言い争いをしたり駄々をこねたりしている女児の姿がありました。担任はじめ教務主任、教頭、校長と代わる代わるその女児の対応のために、昇降口に集まって来る姿も見ていきました。女児の声が日に日に荒々しく大きくなっていくでした。

どうしたのか聞いてみると“教室でみんなと授業に参加するのが難しく校庭に飛び出してしまう。朝は登校することさえ厳しい状況の時があり、母も苦労しながら学校に送ってきている”とのことでした。「さしひでがましいかもしれません」と前置きした上で「もし困った事があればいつでも児童館を利用して下さいね。」と学校にも母にも伝えました。

また、ある日のこと、近隣にある相談支援事業所から児童館に連絡が入りました。内容はその女児と母の事でした。母が女児の様子を心配して相談をしていたようです。担当者からの話しあは、その女児のために児童館を利用することはできないものか、という内容でした。その担当者にも、利用は可能であることを伝えました。

しばらくして「本人の気持ちもあり」ということで、母と担任から「授業の1時間目を児童館で過ごし、朝のスタートに向けて気持ちを整えてから教室に向かうという形をとりたい。」との申し出があり、朝の受け入れを開始しました。

当初は興味のある授業は、担任の声がけを受けて出席していましたが、次第に授業についていけないジレンマやもどかしさが心の中に渦巻き、学校から足が遠のきつつあります。

この2年生女児Cちゃんは、ごっこ遊びや手芸・工作が大好きです。彼女のごっこ遊びには幼なさが見え隠れしていますが、手芸や工作では職員と共に様々な作品を作り上げています。興味のある事には見事な集中力を発揮します。

来館する乳幼児も大好きで、細々とお世話をしてくれます。そんな姿に乳幼児のお母さんたちから「ありがとう。優しいね。」と声をかけてもらっています。

Cちゃんも気持ちに波があり、朝のスタートにつまずくとすべての歯車が狂ってしまいます。歯車が噛み合わなくなると、気持ちのモヤモヤの表現方法として物を投げたり暴言暴力の行動が表われます。試し行動も多く見られます。

彼女は、放課後に2カ所の放課後デイを曜日で分けて利用しています。彼女のこれからについて、彼女に関わっている機関すべての担当者が集まってケース会議を開きました。様々な情報を持ち寄りながら、母の支援の必要性と一定の生活リズムを崩さずに生活することを目指す、ということを確認しあいました。彼女が教室に戻れるようになるまで支援は続きます。先はまだまだ長いように思いますが、参加できた学校行事もいくつかありました。それは彼女にとって自信になる大きな1歩だったと思います。

そして先日、彼女の口から「勉強したい」という言葉が出てきました。丁度そのタイミングで担任が児童館に来てくれたこともあり、その後授業に向かうことができました。落ちついた生活を続けることで、少しづつ教室に気持ちが向かうことを願い、今後も支援を続けていきます。

彼女にとって児童館が『安心できる居場所であり、困った時に助けを求められる場所』となり、みんなと一緒に彼女が学校生活を送ることができるように、後方支援をして行きたいと思っています。

私たちの児童館はマイスクール児童館です。学校生活での子どもたちの様子がとても良く見えます。先生方とも近い距離感で話しができます。Cちゃんが児童館で過ごしている時にも、その日の様子をすぐに伝えることができそれに合わせた対応もすぐにできます。こまめなやりとりができるのが、マイスクール児童館の利点だと思っていますので、それを生かしながら支援をしていきます。

## おわりに

児童館や放課後児童クラブには、今後ますます、様々な背景を抱えた子どもたちが集まってくるでしょう。児童館には、様々な役割・機能が求められるでしょう。

私たちのような小規模の児童館は、大型児童館や児童センターと同じような事業展開はできません。しかしながら、小規模の小回りの良さを生かし、地域と繋がる、関係機関と繋がる、利用者と繋がる、学校と繋がる等、様々なところと繋がりながらできることはたくさんあるはずです。

小規模だからこそ人と人との繋がりを大事にし、職員と利用者がより近い距離でアットホームな児童館、その良さを生かしながらこれからも、子どもたちや地域の皆さんとの心の拠り所となれるよう歩んでいきたいと思っています。

特別な支援が必要な子もそうでない子も、児童館に来てくれる子たちに『否定しない、強制しない、丁寧に』向き合い、1人1人が児童館で自分の良さを發揮して輝くことができるよう、という思いを忘れずに児童館運営を続けていきます。

大人になった時に、自分が輝いていた頃の思い出は、きっと生きる力となるはずですから。